



『We Can!』の特色は？

2020年度までの2年間、全国の小学校で使用される『We Can!』。その具体的な特色や使い方について、加賀田哲也先生にお聞きしました。

『We Can!』は、その名のとおり「英語を使ってこのようなことができるようになってもらいたい!」という期待を込めて作成されたものです。児童用冊子に加え、指導編、指導用デジタル教材、ワークシートなどがあり、これらを組み合わせて効果的に学べるように工夫されています。

ここでは、「聞く」「話す」に、本格的に指導が始まった「読む」「書く」を加えた四つの観点から特色や使い方を紹介します。



加賀田 哲也
かかた・てつや
大阪教育大学教育学部
英語教育講座教授

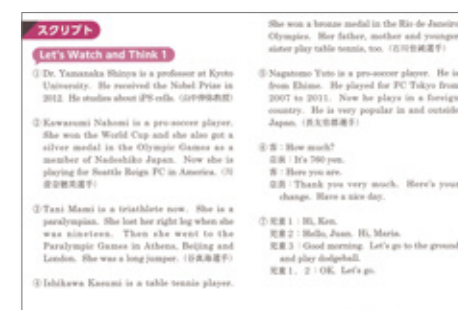
米国シアトルの州立ワシントン大学(理論言語学)および大学院(教育心理学)を修了後、大阪大学大学院人間科学研究科博士課程後期修了。博士(人間科学)。大学で教員養成に携わる他、小学校、中学校、高等学校などで英語授業改善のための指導や教員研修に当たっている。中学校英語教科書『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE』(光村図書)の編集委員を務める。

聞く

まとまりのある英語を聞く。
キーワードは「推測する力」

『We Can!』の指導編を見ると、「Let's Watch and Think」の英文スクリプト(※1)の長さに驚かれる先生方が少なくありません。確かに、かなりの分量を聞くユニットもありますが、児童には全ての情報を理解させる必要はありません。映像を見ながら、既習の知識をもとに新出の単語や表現の意味を推測し、会話や話の概要を理解させます。話の内容が「何となく」分かったというイメージでよいと思います。

英語教育では、「曖昧さ」が残る状態を受け入れ、それに耐えさせることも大切です。すぐに日本語に訳すことは避けるべきでしょう。そのためにも、推測させるためのヒントとなる足場をしっかりと掛けてあげることが重要です。また、児童一人の力だけで理解することが難しい場合は、ペアやグループで考えさせてもよいでしょう。



※1 『We Can!①』指導編p6-7
Unit 1「Let's Watch and Think 1」の英文スクリプト

では、まとまりのある英文を聞く指導はどのように行えばよいのでしょうか。そのためには、まずイラストを見て単語や表現の確認をしながら、これから聞く内容を予測させることが大切です。つまり、聞くための下ごしらえをすることです。次に、実際に聞く段階では、1回目は、全体のイメージをつかませます。その際、内容に関する質問をあらかじめ一〜二つ用意してお

『We Can!』 どう使う



本年度より、小学校外国語活動・外国語科の移行期間が始まりました。授業のつくり方に試行錯誤されている方も多いのではないのでしょうか。本特集では、2020年度の教科化に向け、文部科学省が作成・配布した高学年用新補助教材『We Can!』の特色や活用方法について取り上げます。加賀田哲也先生による解説と、実際の授業事例や関連セミナーをもとに、『We Can!』を使ってどのように授業を進めていけばよいかを考えていきます。

撮影：伊東俊介(p2, 4-7)



くといいでしょう。2回目は、細かな情報を理解させていきます。大事なところでは、その直前で止めたり、何度も聞かせたり、先生の声でゆっくり抑揚をつけながら読んであげたりして、

児童の注意を引きつけます。聞かせた後は、スクリプトの中の単語や表現のいくつかを使って、簡単なやり取りをしてもよいでしょう。

話す 「やり取り」する場面が増加。 キーワードは「Small Talk」と「会話の継続」

新学習指導要領では、「話すこと」が「やり取り」と「発表」に分けられることになりました。この「やり取り」を充実させる活動の一つとして、Small Talkが挙げられます。これは、あるテーマについてのまとまった話を先生から聞いたり、ペアで伝え合ったりすることです。

文部科学省が公開している『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』では、Small Talkのねらいとして、①既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図る、②対話を続けるための基本的な表現の定着を図るの2点が挙げられています。5年生では、指導者の話を聞いたうえで、その話に関わるやり取りを行います。6年生では、まず指導者と児童がやり取りをし、次に児童どうしが相手意識をもってやり取りを行います。

ここで大切なのは、児童が聞きたい、伝えたいと思うトピックを選ぶことです。教師が児童に表情豊かに語りかけ、実物、写真、ポスターなどの視覚的な情報やジェスチャーなどの動作を駆使しながら、概要を理解させます。

また、対話を継続するための指導も行う必要があります。上述の『研修ガイドブック』には、対話を継続するための工夫として「対話の開始」「繰り返し」「一言感想」「確かめ」「さらに質問」「対話の終了」に関する表現例が挙げられていますが、この他にも、児童の実態に合わせ

て、“Sorry, but I don’t understand.” “Please speak more slowly.” “What’s ~ in English?” “How about you?”などの表現も積極的に使用させましょう。

やり取りでは、相手意識をもち積極的に関わろうとする姿勢、対話が途絶えてもあきらめず、何とかして継続していこうとする姿勢を育みたいものです。また、自分の思いが通じたときの「喜び」と、伝わらなかったときの「もどかしさ」も体験してほしいと思います。もしうまく伝わらなかったとしても、どうしたらうまく伝わるかを考えさせる機会につなげたいものです。



読む 推測しながら読む。 キーワードは「アルファベットの音読み」

読み書きの指導では、どうしても個人差が顕著になり、児童間の「得意一苦手」の二極化が懸念されます。児童に過度の負担をかけることなく、ゆっくり丁寧に指導しましょう。

中学年でアルファベットの「文字読み」に慣れ親しむことを踏まえ、『We Can!』では大文字・小文字を認識したり、アルファベットの「音読み」を学んだりします。アルファベットのa～zに加え、ch, sh, th, whなどの読み方にも触れます。この指導では、巻末にあるAlphabet, Animals, Countries, Foodsなどの各種Jingle及びワークシートのSounds and Lettersを活用するとよいでしょう。そして、写真やイラストなどの情報を手掛かりにして、音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を推測して読んでい

きます。語頭音を頼りに単語や文が「読めた！」という体験は、大きな自信と意欲につながるはずです。

『We Can!』ではUnitの最後にSTORY TIMEのコーナーがあり、音声を聞き、イラストを手掛かりに内容を推測したり、音と文字を結び付けたり、単語や文、語順などの認識を深めたりします。6年生用『We Can!②』では、ストーリー中に韻を踏む単語が意図的に並べられており、音声と文字の関係に気づいたり、音が続く楽しさを味わえたりするように工夫されています。

読みの指導では、音声と一緒に英文を指で追いつきながら聞いたり言ったり、韻を踏むところのみを言ったりするなど、児童の実態に合った指示を与えながら取り組ませることが大切です。

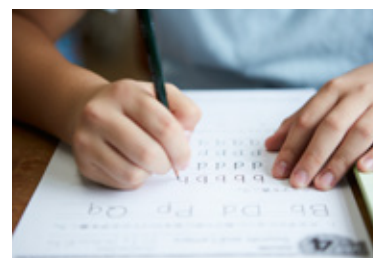
書く 書き写す、例文を参考に書く。 キーワードは「自己表現」

新学習指導要領では、いよいよ書く活動が始まります。アルファベットの大文字と小文字を書くことから始め、これまで音声で十分に慣れ親しんだ単語や表現を書き写したり、例文を参考にしながら、自分のことや身近なことについて、自分が表現したい内容のものに置き替えて書いたりしていきます。また日英の語順の違い

や書くときのきまりについても、基本的な事柄(終止符や疑問符、コンマなどの記号、単語間のスペース、文頭は大文字など)を学び

ます。

ここで留意すべきは、小学校では「書く活動＝和文英訳」ではないということです。書く活動は、あくまでも児童の本当の気持ちや考えを表現させるための「自己表現活動」につながらなければなりません。ですので、自己表現の際には、必要な単語をリストにしたものを用意し、児童にその中から選ばせ、書き写させるようにします。中学校のように、単語や表現を暗記させることはふさわしくありません。また、ペンマンシップの指導に偏ってもいけません。文章を書き終えた後には、みんなの前で発表させるのもよいでしょう。



それでは、実際に学校の事例を見てみましょう →